様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月　４ 日現在

機関番号：３２６１２
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０２６００

研究課題名（和文）共時性の中のディドロ

研究課題名（英文）Diderot in synchronicity

研究代表者
鷲見　洋一（SUMI, Yoichi）

慶應義塾大学・文学部（三田）・名誉教授

研究者番号：２００５１６７５

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：フランス啓蒙哲学者ドニ・ディドロの生活・思想・文学を新しく捉え返すのが本研究の眼目である。人文系研究者の「メンタルモデル」になっている「通時性」重視の歴史観ではなく、同時代の社会状況や歴史背景、あるいはディドロ周辺のさまざまな個人や集団の動向や心性と関連づけて、「共時性」重視の方法でディドロを論じたいと考え、１７６２年という1年間に研究対象を限定し、ディドロの抱えた問題がこの年全体の問題でもあったことの論証を試みて、かなりの成果を挙げることができた。とりわけぷねうま舎から刊行した2冊の研究書に成果は集約されている。

研究成果の学術的意義や社会的意義
危機的状況にあると言われる人文科学研究の領域で、本研究は「複数の超域研究」がもつ強みや有効性を学術的特色ないし独創性として立証するものとなるはずである。これまでタコツボ状の閉域の中で単独に論じられてきた分野ごとの人間、作物、現象や営みが、より広い大局的な視点から捉え返され、新しい光を当てられて、「多面性の人文学」とでも呼ぶべき研究領域への開けを約束する。大学の縦割り構造の組織や心性にメスが入り、美学、芸術学、思想史、歴史学、文化史、文学史、経済史、政治学などの分野同士に協調や融合が生まれるきっかけともなろう。本「共時性」研究によって、人文学にこれまでに見られない領野が切り拓かれれば幸いである。

研究成果の概要（英文）：The objective of this research is to rethink the life, thought and literature of the French Enlightenment philosopher Denis Diderot, not only on the biographical and philosophical levels, but also in relation to the social situation and the historical context of the same period. , and to the tendencies and minds of various individuals and groups around Diderot. Rather than the traditional approach which emphasizes "diachronicity," my study is related to " synchronicity," limiting the scope of my research to a year in 1762, proving that Diderot's personal problems were also problems for the whole year. The effort to extract from periodicals and other historical documents of the 18th century the substantial contribution they can make to our knowledge and understanding of French social and cultural history has by no means been abandoned.

研究分野：人文学

キーワード：啓蒙主義　18世紀　共時性　事件　歴史記述　圏域　ディドロ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

日頃、私たち人文系研究者はある種の「メンタルモデル」に従って考え、感じ、作業をしている。このモデルは研究者側の勝手のモデルであって、必ずしも過去の人物や集団が依拠する枠組みではない。私は長年のディドロ研究を通じて、文学史や思想史などに根強いメンタルモデルである「通時性信仰」、「進歩史観」に対して次第に強い疑問を抱くようになった。私たちの研究作業を深いところで規定するこのモデルの陳腐化を防ぐためにも、「通時性」を補強し、場合によっては代替する「共時性」を軸にした新しい研究方法を探りたいというのが私の問題意識であった。

２．研究の目的

フランス啓蒙哲学者ドニ・ディドロの生活・思想・文学を新しく捉え返すのが本研究の眼目である。人文系研究者の「メンタルモデル」になっている「通時性」重視の歴史観ではなく、同時代の社会状況や歴史背景、あるいはディドロ周辺のさまざまな個人や集団の動向や心性と関連づけて、「共時性」重視の方法でディドロを論じたいのである。１７６２年という一年間に研究対象を限定し、ディドロの抱えた問題がこの年全体の問題でもあったことを論証する。１７６２年は啓蒙主義全盛期を象徴するに足る波乱に富んだ１年である。だが、膨大な資料博捜が事象・事件の羅列に終わらないためにも、１０種類の「圏域」概念を導入し、この１年全体を理論構築と実践記述の両面から構造化する。「共時性」研究の提唱で人文研究に新たな一石を投じたい。

３．研究の方法

本研究が提案するのは、従来型「通時性信仰」の相対化と、それを補強する「共時性」、「同時多発性」、「超域性」研究方法の促進である。具体策として、「資料論」、「圏域論」、「事件論」の３つの論点を支えとする。ディドロを中心に周辺の人間も視野に入れて、大きな議論の枠組みを考えた。共時性研究では横へ横へとテリトリーは広がる傾向になるので、タイムスパンの設定が１年間といった具合に狭くなるのは当然である。同時代人が、そうした限定された期間の「所与」の各々を特定の「メンタルモデル」を介して受容していたと考えるところから、「圏域」概念が生まれた。自然圏域、政治圏域、公共圏域、私的圏域、生活圏域、経済圏域、思想圏域、表象圏域、ユートピア圏域、隠蔽圏域である。以上のカテゴリー枠を設定して、1762 年という一年間の共時的記述を行った。

４．研究成果

（1）若干の論文と講演のほかに、単著を 4 冊（うち 2 冊は近刊予定）執筆し、書評はおおむね好意的であった。以下、いくつかのポイントごとに成果を紹介する。

（2）根源の発想「メタファー思考」と根源の方法「共時性研究」

ディドロ個人を論じるのに、私はディドロ本人が身につけていた「メタファー思考」（一見関わりのない観念や事物を結びあわせる思考）という複合的な方法をあえて使った。研究者が研究対象を真似るのである。そういうディドロを論じるに際して、あえて試みたいメタファー思考の適用法が、「共時性研究」である。「共時性」の歴史は、同時多発の歴史記述である。同時多発である以上、ディドロ一人で済ませるわけにはいかない。ディドロの傍らに、ディドロの感性や行動や発言とおのずとメタファーで結ばれる幾多の事象やテクストや人物を配する必要がある。また、おおかたの研究者が愛用する「通時記述」の因果論や影響論や進歩史観を原

則として排除する。タイムスパンの設定が狭くなるのは当然で、数年から一年単位、一月単位といった、世界史年表であれば、数センチか数ミリにもなるかならないかのような短い期間に限定して、記述がなされる。ここでは1762年という年を選んで、その「一年間」の歴史記述を試みた。この根源の発想「メタファー思考」と根源の方法「共時性研究」については、単著『いま・ここのポリフォニー　輪切りで読む初発の近代』で詳論した。

（3）「圏域」（Sphères）概念。膨大な事象や事件をまとめ、記述が羅列に堕さないためにも、全部で１０種類の「圏域」を設定した。

① 自然圏域　→　　気温、氷河、天気
② 経済圏域　→　　物価指数、農業ほか諸産業
③ 政治圏域　→　　王権、政府の政策、宮廷の動向、戦争、外交
④ 公共圏域　→　　メディア、社会、サロン、手紙、公衆、世論・公論
⑤ 私的圏域　→　　家庭、日記、自己イメージ
⑥ 生活圏域　→　　衣食住、市井のくさぐさ（諸種の広告、薬品、発明など）
⑦ 思想圏域　→　　書物、出版、自然科学ほか
⑧ 表象圏域　→　　芸術、演劇、音楽・オペラ、『百科全書』図版
⑨ ユートピア圏域　→　夢想、理想
⑩ 隠蔽圏域　→　　恐怖、異常、犯罪、処刑、地下文書、検閲

（4）「政治圏域」と「公共圏域」。歴史的にはこの時期から、フランス社会にそれまでの王権集中型の「政治圏域」と重なるようで区別しなければならない新しい「公共圏域」が登場する。今日で言うところの「メディア」や「世論」、「公論」にあたる。ヴォルテールがカラス事件で、「私人」としての立場を超え出てあえて「政治圏域」に介入し、裁判を覆した振る舞いが注目される。

（5）「私的圏域」の開示：ルソーとディドロの自伝企画。二人はヴェルサイユと直接のパイプを持たないし、影響力もなきにひとしい。1762年のルソーとディドロを並べて論じる足場のようなものがあるとするなら、それはまさしく「公共圏域」と連れ合うように成立してしまう「私的圏域」において、二人がそれぞれ異なったやりかたで「おのれを語る」、すなわち「自伝記述」の企てに着手し始めた状況である。ルソーとマルゼルブ宛て書簡、ディドロと愛人ソフィー・ヴォラン宛て書簡がそれぞれ論じられる。これについては単著『一八世紀　近代の臨界　ディドロとモーツアルト』で詳論している。

（6）自然圏域とユートピア

アルピニストのソシュールの仕事や、ほぼ同時にアルプスを描出したルソー『新エロイーズ』（一七六一年）が注目される。さらにほぼ同時に、スイスと英国で類似の文学作品が刊行され、たちまちヨーロッパ中で翻訳がなされる。ザロモン・ゲスナーの『アベルの死』（一七五八年）と『牧歌』（一七五八年）であり、ジェームズ・マクファースンが翻案した『オシアン』（一七六〇～六二年）である。

（7）表象圏域：『百科全書』の図版と「サロン」。本文巻が１７５９年に禁止された『百科全書』だが、それに代わるものとして１７６２年から図版が刊行され始めた。またルーヴル宮で隔年開催が始まっている「サロン」展の批評を、ディドロは５９年から開始している。図版と美術批評の相関性について考える。『百科全書』、『サロン』については業績が多く、それらは近刊の単著『編集者ディドロ』にまとめられている。

（8）思想圏域では、思想史の主題として、目下進行中の英国を相手取った七年戦争を背景に、「愛国心」を謳う詩作品が量産されている。また、研究者がディドロのみの問題として論じてきたきらいのある「後世」という主題が懸賞論文の題になるなど、ある種の流行だった事実を突き

止める。ほかに、この年、思想圏域でもっとも注目されてよい書物は、故ニコラ＝アントワーヌ・ブランジェ（一七二二～一七五九）の遺作『東洋専制主義の起源に関する研究』である。

（9）宗教問題と教育問題

1762 年におけるフランス社会で最大の話題は、翌年の和平に向かう七年戦争の首尾を除けば、何といってもイエズス会の解散である。そして、その事件が巻き起こした今ひとつの波紋は教育問題である。同会の解散は、それまでフランスにおける中等教育を担ってきた同会のコレージュが閉鎖されることを意味していた。ここではむしろルソーの『エミール』が放つ強烈な光彩の陰で、従来あまりにも等閑視されるきらいのあった、同時代の「公教育論」を取り上げてみたい。

（10）文学の場所

啓蒙期の共時性研究をしていて一番悩ましいのが文学の扱いである。そもそもこの時代に我々が考えるような「文学」などというものは存在しないことがまず問題であるが、それを知りつつも、つい我々は易きについて、「苦手」な古いジャンルや「マイナー」な作品を忌避していないだろうか。その証拠をいくつか挙げて、あえて「マイナー」な作品に照明を当てる。

（11）時代の暗部

最後に触れておきたいのは、私が「隠蔽圏域」と名付ける時代の暗部である。一方ではフランス国家による抑圧と処罰の装置がこの年いかに稼働していたかが問われ、もう一方で目につくのは、そうした装置に怯えつつも、あちこちで蠢き始めている、不逞で不気味な不道徳や破廉恥の気配ないし兆候である。

その代表的な未刊の不穏な作品としてディドロの『ラモーの甥』がある。共時性研究の観点からすると、この年、ついに日の目を見ることのなかったディドロの最高傑作『ラモーの甥』になりかわって、この怪物的テクストとさながら「メタファー」の糸で結ばれているかのような共通性をもつ形式やテーマで目立つ著作が若干見受けられる。一番注目されてよいのは、『ラモーの甥』の舞台になっているパレ＝ロワイヤル公園が当時ある種の文学上のトポスとして無視できない役割を演じていたことである。ここで注目したいのはフランソワ＝アントワーヌ・シュヴリエという物書きである。シュヴリエの『才人の暦』は、いわば王立暦『アルマナ・ロワイヤル』のパロディーといった趣があり、「暦」の形式を借りたテーマ設定（飽くまでおふざけだが、天体の「蝕」の記録から始まる）と、さながらカフェ・ド・ラ・レジャンスにおけるラモーの甥を彷彿させる屈託のない談話の文体で、かなりの人気を呼び、同時に当局から危険視されたであろうことは想像できる。

おなじく、シュヴリエの代表作である『流言屋』は、前年末に刊行されたが、好評でたちまち重版された。この著作がさまざまな点で、『ラモーの甥』と酷似していることは一読明らかである。

1762 年の文学現象として指摘した、『ラモーの甥』、そしてシュヴリエたち「パレ＝ロワイヤル派」の作風に著しい「談話」、「饒舌」、「お喋り」、「能弁」、「軽口」といった特徴は、多くの研究者がまったく気が付いていないか、あるいは気が付いていない振りをしている「隠蔽圏域」にこそ、『ラモーの甥』をはじめとする「パレ＝ロワイヤル派」の文学作品群は位置づけられるべきなのである。『ラモーの甥』にしろ、その出来の悪い不肖の息子のような『流言屋』にしろ、一見、表面を飾る無数の雑駁な話し言葉は、類似の古典作品に比べてどことなく「気品」や「格調」に欠ける。『ラモーの甥』も『流言屋』も、作品の味わいは人物同士の典雅な交際や社交ではなく、生き馬の目を抜くような台詞のやりとりであり、皮肉やあてこすりの応酬である。私見では、『ラモーの甥』や『流言屋』を構成している文学性というも

のがあるとするならば、それは検閲官がこれといって介入はしにくいにせよ、どこか不気味なものを嗅ぎつけざるをえないようなパロディ精神と叛逆の身振りなのである。

『ラモーの甥』をはじめとする「パレ＝ロワイヤル派」については、パリで行った講演２回と、東京日仏会館での連続講演で触れ、本格的には近刊の単著『１７６２年の共時的記述』にまとめられている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 鷲見洋一	４．巻 80
２．論文標題 博論異聞 ― 『ラモーの甥』の昔と今 ―	５．発行年 2017年
３．雑誌名 流域	６．最初と最後の頁 24-31
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

１．著者名 鷲見洋一	４．巻 81
２．論文標題 博論異聞 ― 『ラモーの甥』の昔と今 ―（承前）	５．発行年 2017年
３．雑誌名 流域	６．最初と最後の頁 27-32
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 ―

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　8件／うち国際学会　4件）

１．発表者名 SUMI Yoichi
２．発表標題 Le Neveu de Rameau hier et aujourd’hui
３．学会等名 Journee Le Neveu de Rameau a la Sorbonne（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 SUMI Yoichi
２．発表標題 Le Neveu de Rameau dans sa posterite internationale
３．学会等名 Conference de Yoichi SUMI　（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 SUMI Yoichi
２．発表標題 A la recherche des sources du grand dictionnaire: une etude genetique de l ’ Encyclopedie.
３．学会等名 What is the Enlightenment? New answers to the old question（招待講演）（国際学会）
４．発表年 2017年

１．発表者名 鷲見洋一
２．発表標題 「教養」としての『百科全書』ー　「共時性」の中の文化と知識
３．学会等名 慶應義塾大学教養研究講演会（招待講演）
４．発表年 2019年

１．発表者名 鷲見洋一
２．発表標題 "Celibat" et "Adultere" dans les dictionnaires de l'Ancien Regime
３．学会等名 アンシアン・レジーム期における家族とその周辺（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 鷲見洋一
２．発表標題 「地図」1730年代の共時的記述
３．学会等名 東京日仏会館教養講座　（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 鷲見洋一
２．発表標題 「事典」『百科全書』の世界
３．学会等名 東京日仏会館教養講座　（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 鷲見洋一
２．発表標題 「家計簿」ドニ・ディドロの生活と経済
３．学会等名 東京日仏会館教養講座　（招待講演）
４．発表年 2020年

１．発表者名 鷲見洋一
２．発表標題 「公園」パレ＝ロワイヤルの文学
３．学会等名 東京日仏会館教養講座　（招待講演）
４．発表年 2020年

〔図書〕　計5件

１．著者名 鷲見洋一	４．発行年 2021年
２．出版社 ぷねうま舎	５．総ページ数 -
３．書名 １７６２年の共時的記述	

1．著者名 鷲見洋一	4．発行年 2021年
2．出版社 平凡社	5．総ページ数 -
3．書名 編集者ディドロ	

1．著者名 鷲見洋一	4．発行年 2019年
2．出版社 ぷねうま舎	5．総ページ数 304
3．書名 いま・ここのポリフォニー	

1．著者名 Sergey Karp, Yoichi Sumi, Jonathan Israel, Vincenzo Ferrone, Franck Salaun, Eszter Kovacs, Edoardo Tortarolo,etc.	4．発行年 2018年
2．出版社 Moscou,Naouka	5．総ページ数 456
3．書名 Qu’est-ce que les Lumieres? Nouvelles reponses a l’ancienne question	

1．著者名 鷲見洋一	4．発行年 2018年
2．出版社 ぷねうま舎	5．総ページ数 392
3．書名 一八世紀　近代の臨界　ディドロとモーツアルト	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関